

豊福の歴史

豊福城について

※ 城と言っても、中世の城は砦(とりで)みたいなもので、戦国時代の山城や安土桃山時代から江戸時代の近世の天守閣を持つ城とはイメージが違う。

豊福城は、南北朝・室町時代から戦国時代にかけての中世の城である。

「豊福(とよふく)」は熊本県のちょうど中央あたり。豊福と書いて「とよふく」、なんとも幸多き地名だと思う。

豊福あたりは江戸時代頃は益城郡だが、古代から中世にかけては八代郡に属していたらしい。「和名抄」に八代郡豊福郷、「日本霊異記」に八代の郡豊服の郷、が出てくる。また、菊池重治(きくちしげはる)から相良長祇(さがらながまさ)に宛てた、年不詳の安堵状に「八代郡並益城郡之内豊福二百四十町」とあるという(平凡社「熊本県の地名」)。なお同安堵状は大永三年(1523年)6月のことともいう(池田こういち氏「肥後相良一族」)。

「豊福城」は、豊福小学校の南東500mくらいのところにある。道案内の標識がなければ分からないくらいのちょっとした高まりだ。もともとは北方の丘陵が南に延びた台地の先端で、築城の際に掘り切って独立丘陵としたものという(現地案内板)。形状は楕円形で、堀切に続く水田地帯が外堀、独立丘陵をさらに細分する堀切が内堀と考えられていて、この内堀の南側に二段の高まりがある。高まりといっても、今では上の段で比高5~8メートル程度、海拔20メートル程度のものだ。上の段はかつてはゲートボール場になっていた(熊本県文化財保護協会「熊本県の中世城郭」)。

豊福は古くから交通の要衝であったため、その周辺では多くの合戦が行われ、豊福城は争奪的となっていた(現地案内板)。豊福は、内陸の甲佐から宇土半島への交通路、および熊本平野から八代への交通路(のちの薩摩街道)が交差する位置にあり、また昔は海に面していた(平凡社「熊本県の地名」)。

交通の面だけではないと思われる。南から攻める相良(さがら)氏にとってはさらなる領地拡大の橋頭堡(きょうとうぼ: 相手を攻めるあしがかり)として、北から攻める名和(なわ)氏にとっては橋頭堡というよりも居城の宇土古城を守る縦深(じゅうしん: 軍隊で、最前線から後方に至るまでの縦の線)を形成するための拠点として、ともに重要だったと考えられる。

豊福城の築城時期、築城者は不明だ。現地案内板では、建武年間に名和義高(なわよしたか)の代官・内河彦三郎義真(うちかわひこさぶろうよしざね)が八代に下向しているのも、その頃の築城だろうと推定している(現地案内板)。いわゆる鎌倉幕府が滅んで(1333年)、14世紀前半の南北朝の時代と思われる。

豊福城は、名和氏と相良氏が激しく奪いあった時代のものである。その後、大きな変革の時代が訪れ、相良頼房は島津氏に降伏、その島津氏も豊臣秀吉に屈服し、佐々成政(さっさなりまさ)、ついで小西行長(こにしゆきなが)が領主となるが、これも関ヶ原で敗れる。その激動のなか、豊福城の名前は出てこなくなる。時代が変わり、いつの頃か打ち捨てられたのだろう。結局、江戸時代に入ると用を果たさなくなっていたと思われる。

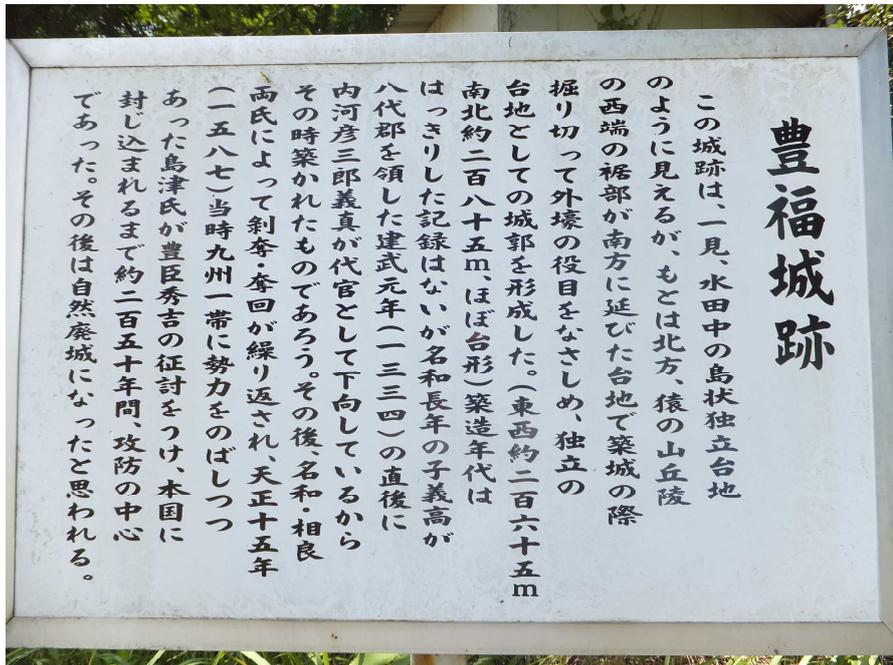
激しい奪い合いのあった豊福城だが、今は国道3号線の横にひっそりとしている。ゲートボールでも使われなくなり、平坦な広場は雑草が繁茂している。ただ、銀杏と楠の大木が立ち、その日陰に「大東亜戦争記念(昭和18年)」の碑が立っているのみである。梅雨の晴れ間に訪れたが、「つわものどもの夢の跡」といった風情であった。



※この絵のような天守閣を持つ城ではない



手前から見た城跡の小高い丘の城跡



城跡の説明版